

# 第12回 音程の不確かさも忘れる 和泉雅子のスターとしての魅力

今から9年前、2008年10月に『おとなの銀座』と題されたCDがマイナーレーベルから発売されました。CDの帯に記された「あのゴールデンコンビ、復活！ 日活ヤング・アンド・フレッシュ！」のリードコピーでおわかりでしょうか。山内賢と和泉雅子のデュエットCDです。

ただし、これは再発CDではなく、すでに還暦を迎えていたふたりが、『二人の銀座』など、かつての持ち歌を新たに吹き込んで収録し、山内が亡くなる3年前に発売されたものです。

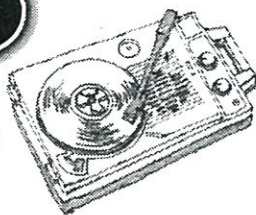
封入されているジャケットの表紙と裏表紙には半世紀前のふたりの写真が掲載されていますが、内側には08年当時の山内と和泉が銀座4丁目交差点近くの三愛ビルと鳩居堂の看板を背にしたスナップ写真が掲載されています。1966（昭和41）年に発売されたシングル盤ジャケットの背景に写っていた森永の地球儀ネオンもすでになく、銀座の象徴が変遷していくこともわかります。

銀座・三原橋で3代続く寿司割烹店の娘として生まれ育ち、今でも生活の場である「わが町」を見つめる

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いままで

堀井六郎  
絵・松本 浦



和泉のまなざしからは冒険家の厳しさではなく、地元民の穏やかささえ感じられるようです。

50年前、『二人の銀座』を歌う和泉雅子の歌唱力について、中には酷評する人もいましたが、「あつつい（熱い）ふーたーりー」と溜息混じりに歌う歌唱法などは、優等生の吉永小百合にはもちろん無理だろうし、和泉にしかできないケレン味あふれる芸とも言え、そこには音程の不確かさなどを忘れさせてしまうくらいスターとしての魅力があふれていました。そのあたりは、和泉も十分に意識していて、42年後の『おとなの銀座』でも楽しそうに歌いながら、

期待に伝えてくれています。

ベンチャーズのオリジナル・インストナンバー『GINZA LIGHTS』という曲に、あとから素敵な歌詞を当てはめていった永六輔にも感謝しなければいけませんね。

VANやJUNのブランドを着こなした若者が闊歩した「みゆき通り」や銀座中央通り近くで交差する「すずらん通り」でのウインドウショッピングの楽しさを紹介しつつ、明るいラブソングに仕立て上げているのは、すでに昭和40年から制作が始まっていた「にほんのうた」シリーズ（曲・いずみたく、歌・テュークエイセス）と共通した名人芸です。

ページメントやウィンド、そして、キスという外来語を使い、エンディングの「ミーフアミレドシラ」に「ふーたりの銀座」の言葉を当てたのは、流行に敏感な放送作家の面目躍如といったところで、さすがだと思えます。

『二人の銀座』の翌年発売の『東京ナイト』（曲・ベンチャーズ）とともに、作曲者にこだわらなければ、永六輔が生み出した「にほんのうた」の一部であるような気がします。

